

2022年2月13日 聖餐式説教

イエス様が教えを宣べ伝えた場所は、当時礼拝で用いられていたユダヤ教の会堂ではなく、丘の上やガリラヤ湖の湖畔、町や村の広場などでした。先週の福音書の箇所もそうでしたけれども、イエス様の周りを大勢の人がひしめき合うようになってしまい、教えを聞くどころではなくなっていましたので、イエス様はガリラヤ湖の漁師に頼んで舟を10mほど漕ぎ出させ、その舟の上から岸にいる群衆へ教えを宣べ伝えるようになっていました。

さて本日の福音書にありました「貧しい人々は幸いである」という教えは、皆様もなじみの深い個所ではないかと思えます。この教えは少々表現に違いがあるもののマタイによる福音書とルカによる福音書に出てくる、イエス様のひとまとまりの教えで、マタイによる福音書は教えが語られたのが山、山といってもガリラヤ湖にほどちかい丘の上ですが、そこで語られたことから、このひとまとまりの教えを山上の垂訓、あるいは山上の説教と呼んでいます。私たちは礼拝で必ず用います主の祈りも、この山上の説教の中でイエス様が教えられた祈りです。

それに対してルカは、本日の福音書にありましたように、山を降りて平らなところで語られたことから、平地の説教と呼ばれます。

同じ教えが、かたや山の上で語られ、かたや平地で語られたと書かれているのは興味深いことです。これはどちらが正しいのかではなく、語られた内容について現わしているのです。マタイは、イエス様の教えに権威があったということで、山の上から語られたと語っているのに対し、ルカは、神の国の教えが、そして神の国自体が私たちの世界に訪れたということで、平地で語られたと言っているのです。同じ教えであります。福音記者たちが私たちに何を伝えようとしたかの違いによって、このように語られた場所が異なっているのだと考えられています。

このようにルカは自らの福音書の中で終始、神の国が私たちのところへ訪れた、この救いから漏れる人は一人もないのだと伝え、当時特に蔑まれていた人々を多く登場させ、その救いの真実を伝えたのでした。

さてこのことから日本聖公会では、本日の顕現後第6主日を、ハンセン病問

題啓発の日と定め、そのための祈りを共にすることになっています。ハンセン病については皆様よくご存知のことですので、病気そのものについては割愛させていただきますが、この病気もさることながら、この病気によって起きた差別が、聖書の時代はもとより、現代社会でも根強く残っているのに気づかされます。

20 世紀になってハンセン病の特効薬が開発されたことにより、ハンセン病は不治の病から治る病気となりました。現在日本国内で、ハンセン病の原因となる菌を持っている人は一人もいません。その意味ではハンセン病は国内に存在しないことになります。にもかかわらず、その差別はなくなることなく、今日もなお続いています。そして、自分から遠ざけたい存在を拒否する心へとつながり、これが学校のいじめや多くの社会問題へとつながっているのです。ハンセン病について私たちが学ぶのは、ハンセン病のことだけでなく、現代社会から差別がなくなるため、その人が最もその人らしく生きることができる社会を実現するために、私たちが取り組まねばならないことなのです。

本日の特祷にありましたように、イエス様は病気の人を癒し、健やかな命を回復されました。現代社会において差別のない健やかな社会を築くことが、現代社会にある教会の使命の一つであることを改めて覚え、本日の教えに耳を傾けたいものです。